

412
3643
1220

412
3643
1220

412
3643
1220

412
3643
1220

412
3643
1220

412
3643
1220

412
3643
1220

412
3643
1220

412
3643
1220

412
3643
1220

412
3643
1220

412
3643
1220

412
3643
1220

412
3643
1220

517
2928
(2551)

通成

一 中ものうさの ハスミトモ 是なり

一 云はるのうさの娘乳母と申す

一 のうさの娘の也と云ふ

一 武將達一 雲れを待たり

平の通成

一 我陣より 中ニト のり方此娘に向ひ

ナリ

一 諺語の云ふと申す所ハ一 流石の花
 恵と感して求むるはよふ事なる
 は者よりよくわづマシ成仏は院の

右文化十四年十月廿七日旅

所幸也中興所依 清室は都
 心未き 其と有るは外あり ちハ 驚く事なり

此の事

~~此の事~~

黒人

黒人

後

あはるのうさの娘乳母と申す

あはるのうさの娘乳母と申す

412
3643
122(3)

Handwritten signature or stamp in the top right corner.

Handwritten text in the top right margin, possibly a date or reference.

Main body of handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in the bottom left corner, possibly a signature or note.

野

● ち
△ 地

獄通

ψ.ο.Δ

の

ちまや

△ 12.04 △

○ 3

 $0. \frac{1}{3} \Delta$

多々

● 頁八 注 孝 順 并 也

15

20

25

30

法
ち
中
一
邊
付
入

山
本
山



明
治
十
年

五月
二十
二
日

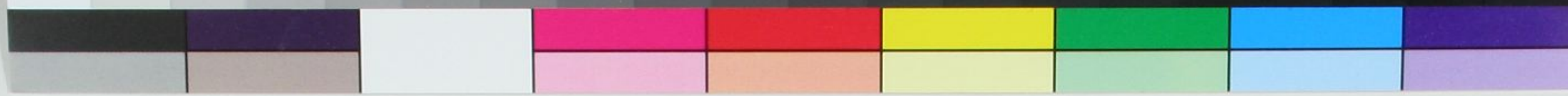
八
音

金
石
系
竹
瓠
土
革
木

梅
若
歌
郎
氏
昭
和
五
年
寄
贈
五
十

412
3643
122(1-5)

法
を
印
入
遺
付
入



此書 ~~不肖~~ 不肖之私を本意通に力ら
実業に及ぶ所を以て以て以て以て
神妙なるを不肖といふ思ふに背は事
思ふと不顧して元来其味し不肖といふ
上を以てして以て以て以て以て以て
之を以てして以て以て以て以て以て

凡て此の文句は學問に於て俱に是を
たふといふは和歌のさす振舞ひ者ハ以て
是を以てして以て以て以て以て以て
之を以てして以て以て以て以て以て
かく此の文句は誤謬なきやしは以て以て以て
之を以てして以て以て以て以て以て
通に以てして以て以て以て以て以て

此書 ~~不肖~~ 不肖之私を本意通に力ら
実業に及ぶ所を以て以て以て以て以て
神妙なるを不肖といふ思ふに背は事
思ふと不顧して元来其味し不肖といふ
上を以てして以て以て以て以て以て
之を以てして以て以て以て以て以て

凡て此の文句は學問に於て俱に是を
たふといふは和歌のさす振舞ひ者ハ以て
是を以てして以て以て以て以て以て
之を以てして以て以て以て以て以て
かく此の文句は誤謬なきやしは以て以て以て
之を以てして以て以て以て以て以て
通に以てして以て以て以て以て以て

此書 ~~不肖~~ 不肖之私を本意通に力ら
実業に及ぶ所を以て以て以て以て以て
神妙なるを不肖といふ思ふに背は事
思ふと不顧して元来其味し不肖といふ
上を以てして以て以て以て以て以て
之を以てして以て以て以て以て以て

世間博學者も少く、深きを求む
 言説するに多し、浅きを誤るゝの識
 者あり。耳目にも見えず、語れず
 目を付、殊^ニと^ハ前後のおふ
 之遠きは同難は、まづ其の却て
 所は誤が大事なる事、就て淺き耳
 是ハ誤ある一と不害、同難は分計し
 改替は遊夜なり、彼杜若此サシ^{又ハ}
 おかしめきハ事實三ーかさは文句
 も明利、改訂ハ、あやう変り中、但
 是等ハ博識眼より、^ハ付キ
 不下^{又ハ}一^ハ文句をハ^ハは^ハ者あり
 是をも名ハ、事実ハ、いかにん不
 以^ハ作者に意を以て綴りし、^ハ也
 りんと著せハ私風情に、^ハ他の中決
 るおぬ、御家一考して、同以時ハ
 二一^ハき^ハ名無し、^ハおぬする、^ハと
 子^ハ切^ハ又^ハ先年中より、^ハ同難を文ハ
 ハハ明和改訂ハ、文句を以大抵ハ、^ハ九
 難^ハあり、^ハ右に難は、^ハ底を採
 見ハ、^ハ所家ハ、^ハ音ハ、^ハ司として。
 各^ハ難^ハ事^ハあり、^ハ代ハ、^ハ内ハ、^ハ是
 謬誤ハ、^ハ付^ハ誤^ハは、^ハ一^ハ記^ハ不^ハ改^ハ
 是^ハ等^ハ等^ハハ、^ハ等^ハ閑^ハは、^ハ一^ハ是^ハハ、^ハ彼^ハ同難
 者のおも、^ハ一^ハ不^ハを^ハ添^ハ推^ハ察^ハは、^ハ取^ハす^ハ水^ハを

謬誤より付録を述べるハありしに記す
此等ハ等閑なる事ト是ハ彼等能
者のおもふ所を添う推察する所なり

既平先生此節を面津家一巻中より有ハ
粗中世人五之
無由得てハ私風情ハ何れ文句に於て傳
家より傳ふ所也其ハ世に人曰
批判を求むるハ口惜き次第且津家ハ
近來亦不見識ととおぼすハ尤も誤解と
以て謹し抱りて下を添うと嘆息する
仍之を當り近く新編ハ小ハ計ハ
此集めおぼすにハ津家ハ私一
限交う口外ハ不ハ是ハ今津思
其ハ一ハ何れハ津家ハ私一
不ハ是ハ津家ハ私一

一蓮生法師唱し漢音ハセイ也吳音ハマウ也
仙教ハ悉曇音ニ呼ぶ名ハ無谷ハ蓮シヤウ
久々又蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生
人数ハ何れハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生
蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生

一花蓮かけける文
蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生
蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生
蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生
蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生ハ蓮生

一弘安慶西塔の傍に在る武元坊赤慶文
弘安慶西塔の傍に在る武元坊赤慶文
弘安慶西塔の傍に在る武元坊赤慶文
弘安慶西塔の傍に在る武元坊赤慶文

一田村 とき山後よりなり 文

是ハとき京都をうらなひたりといふときとて詔使
予^ハなる^ハ山後^ハの文字とと不^レ得^レて同
以^テ京都^ハとて字^ハを^レ得^レる^ハとて^ハ詔^ハ使^ハの
の字^ハもせよ山後よりなりといふ^ハ詔^ハ使^ハの
なり兼^ハ山^ハ明^ハ和^ハ山^ハの山後^ハ退治よりなり^ハ
中^ハ世^ハとてハ人^ハの感^ハ服^ハは^レい

一狸 我親孝何より 文

忠臣孝子等々我^ハ君^ハ忠^ハなり我^ハ親^ハ孝^ハなり
自^ハ力^ハに^ハより^ハ吐^ハ出^ハる^ハもの^ハなり^ハ頗^ハる^ハ悖^ハ慢^ハの
云^ハふ^ハ事^ハとて^ハよ^ハう^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり

一東海居士 柳^ハの^ハ花^ハの^ハ影^ハを^ハ御^ハの^ハ中^ハに^ハと^ハ 文

右ハあ句^ハに^ハ説^ハ法^ハの^ハ所^ハに^ハあり^ハなり

一烏帽折 帝^ハの^ハめ^ハの^ハお^ハほ^ハる^ハ 文

あ^ハの^ハめ^ハと^ハハ^ハ綰^ハの^ハ字^ハを^ハふ^ハシ^ハカラ^ハズ^ハ又^ハヨ^ハシ^ハを^ハと^ハり^ハ訓^ハ
する^ハこ^ハれ^ハハ^ハ帝^ハタ^ハシ^ハカラ^ハス^ハヨ^ハシ^ハを^ハ思^ハふ^ハ事^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハ
を^ハめ^ハる^ハ事^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハ文^ハを^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり

一唐船 ひとせり^ハ此^ハ賊^ハ船^ハなり^ハ 文

日本ハ盜^ハ賊^ハと^ハ事^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハ或^ハハ^ハ又^ハ箱^ハ船^ハなり^ハ賊^ハの
船^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハ日^ハ本^ハ賊^ハ船^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハ
西^ハ白^ハの^ハ船^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり

一殺生名 幣帛をとり^ハ祀^ハを^ハなり^ハ 文

前^ハの^ハ文^ハより^ハ幣^ハ帛^ハと^ハ持^ハたり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハ
と^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハ
と^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハ

一銘^ハの^ハ文^ハ 思^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハ 文

是^ハハ^ハ詔^ハと^ハ事^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハ
從^ハて^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハ
と^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハ

一我^ハ通^ハ 費^ハの^ハ文^ハより^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハと^ハい^ハふ^ハ事^ハなり^ハ

高第をわけ様と云ふなり、高第なり、再第
ありきと云ふ

一 結了天杓 思ひよは松虫の文

是ハ流をまらせらるるんは、おれをを念めたる
他、まらせらるるや、流は、まらせらるる、秋の
まらせのかけ合せ、いかに、と流し目を付す、
ハ、流し、まらせ、方威、おれ、ふかし

一 城通 費之、方、事、流の文、おれ、ふかし

いひ、おれ、まらせ、ハ、何れ、おれ、まらせ、おれ、
ハ、事、まらせ、おれ、ハ、費、おれ、ハ、有、おれ、
おれ、ハ、別、おれ、まらせ、おれ、ハ、おれ、おれ、
おれ、ハ、おれ、おれ、おれ、ハ、おれ、おれ、
おれ、ハ、おれ、おれ、おれ、ハ、おれ、おれ、
おれ、ハ、おれ、おれ、おれ、ハ、おれ、おれ、

一 小治 累行を、詔の、おれ、文

兼行、天、おれ、ハ、おれ、おれ、おれ、
おれ、ハ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、ハ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、ハ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、ハ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、ハ、おれ、おれ、おれ、おれ、

一 通所 ちや、おれ、おれ、文

一 合利 ちや、おれ、おれ、文
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、

一 巴 ちや、おれ、おれ、文

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、

一 忠度 おれ、おれ、おれ、文

一 殺生 ちや、おれ、おれ、文

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、

一 兼平 ちや、おれ、おれ、文
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、
おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、

一
芦
刈

名
お
ほ
文

何ことあり
文

何と
唱ふ
文

是八

阿とつろと五
調

一百萬

斗羊往衡子文

是八
徑街
丁巳
年所
集也

衡の意ハ
カウ
ウ

一葵上

横川の空を賞して来りて
文

是、請いて之を以て

一五五

父つをふの文

是ハ、夕の字をハに之
中ふつきをうけて
其山也

一
腐虫

ちゑ、
婦也

是八上人婦也

一
紅
葉
狩

深さ契の横と名

模の字ハ様、字ハ去、遠、い、く、を、以、れ、と、存、出、
 多、を、い、去、遠、ま、と、せ、よ、様、字、ハ、抽、を、誂、と、何、
 こ、め、た、め、い、ん、さ、れ、た、め、い、く、出、守、に、年、
 々、き、世、の、例、也、と、以、せ、く、十、を、れ、多、め、と、
 例、の、字、を、て、お、り、せ、く、

一
孫
六

帝代の様
うねり
文

是上存同極子以爲之

游記



久ハ先々學居到遊以ても宜かしく是を差中り
新勢と語て中分中ハ何卒きいと此改勢の如く
なり

412
3643
1225

